

子どもにどういう言葉をかけるか…



2学期は教育実習（4週間）、養護教育実習（3日間）に加え、大学院生の参観（4週間）や教育アシスタント（大学2・3年生）やプレアシスタント（大学1年生）など多くの学生が学校に来て将来、教員になるための実習を行っています。中には私が前回、本校に勤務していた時に小学生だった児童が立派に成長した姿で実習に来ていて嬉しく感じると同時に時間の経過の早さに驚かされました。

実習生に「どうして教員を目指そうと思ったの？」と志望動機を尋ねると「当時の担任の先生が優しかったからです」と答えてくれました。教育は“魂と魂の触発である”と言われますが、子どもたちにそうさせたその教員（元同僚ですが…）は素晴らしいと思いました。モアハウス大学のある教授は子どもの頃、本読みが苦手だったそうです。本読みの時間、1人ずつ順番に読んでいくことがあり、まわりのみんなは上手でスラスラと読んだあと自分は読めて当然の文字が読めず、分からない文字はとばしながら読んでいったため、まわりの子どもはみんな笑ったことがあったといいます。しかし、そんな中、担任の先生は笑わず、あとでそっと「本読み上手になりたい？」と声をかけたそうです。その翌日から、放課後の本読みの特訓が開始されたのです。そして、教授は本読みだけでなく、勉強も好きになり、学力も急に伸びたと述懐してみえます。「自分はできない。自分はダメな人間だ。」と思わされてきていた子どもが、大人の眼差し、声掛けて自信が生まれ、他者に対する思いやりの気持ちもわいてきたそうです。まさにこれが学校であれ、家庭であれ本物の教育であると思います。本読みができない児童に「もっと家で練習してきなさい」だけでは、本読みは上手にできるようになったとしても将来、大きくその未知の才能を開花させていくことはできなかつたでしょう。人を育てるということは非常に尊い作業ではありますが、非常に難しいことでもあります。教授のこの話を私は常に心に置き、これまでも子どもたちと関わってきました。勉強ができない、悩みをかかえていく子どもに接する時、どう「励ましの言葉」をかけていけるか、大人としての力が試されていると思います。本校に来ている学生にもこのことを分かってもらえたらいいなあとと思っています。



1日（火）図書館ボランティア

2日（水）定時退校日

5日（土）運動会・作品展 ※雨天順延

7日（月）運動会の代休

18日（金）2年町探検

9日（水）SC委員会

21日（月）学校運営協議会

10日（木）2年遠足

3年社会見学

11日（金）マザーグースの会 ※2年2・3限

22日・23日 修学旅行

15日（火）図書館ボランティア 安全5

25日（金）安全5

16日（水）SC

28日（月）4年社会見学

30日（水）SC